

## 【書評】

清水栄子著『アカデミック・アドバイジング その専門性と実践  
——日本の大学へのアメリカの示唆』(2015年)

SHIMIZU Eiko, "Academic Advising: Its Expertise and Practice" (2015)

大西 好宣

ONISHI Yoshinobu

**要旨** 本書は、リサーチ・アドミニストレーター（URA）やインスティチューショナル・リサーチャー（IR）と同様、大学における専門職のひとつであるアカデミック・アドバイザーに焦点を当てた、日本語では初の貴重な文献である。具体的にはまず、アカデミック・アドバイジングの職能を定義した上で、それがアメリカでどのように生まれ、現在では8割の大学が採用するまでに発展してきたかを先行研究から明らかにする。さらには、アメリカの4つの大学への訪問調査により、実際の制度運用については大学ごとに特徴があること、NACADAと呼ばれる専門職団体がアカデミック・アドバイザーの育成に大きな役割を果たしていることなども紹介される。

### 1、本書の概要

今世紀に入り、大学における従来の教員と事務職員とをつなぐ役割として、いわゆる「専門職」の存在が脚光を浴びている。その代表的なものは、リサーチ・アドミニストレーター（URA）やインスティチューショナル・リサーチャー（IR）であり、これら専門職の登場は、高等教育人口の増大や大学業務の高度化という現代的な背景を考えれば、まさに必然とも言えよう。

本書は、そのような専門職のひとつであるアカデミック・アドバイザーに焦点を当てた、日本語による初の貴重な文献である。取り上げられている内容は様々で、アカデミック・アドバイジングという新たな専門的職能の定義に始まり、その実践的な側面と現実の課題、さらには日本への示唆にまで及ぶ。

これらの研究成果は、当該分野のいわば先進国と言ってよい、アメリカでの詳細な事例調査をもとにしている。調査の対象としては、大学はもちろん、アドバイジングの規準作りや、当該専門職の養成に大きな影響力を持つ専門職団体National Academic Advising Association (NACADA) も含まれている。

### 2、本書の構成と内容

本書の構成は下記のようになっている。各章末には、関連する貴重なデータが数多く盛り込まれており、本書の隠れた特徴となっている。以下、順番に沿って各章のエッセンスを紹介したい。

#### 序章 本研究の目的と課題

アメリカにおけるアカデミック・アドバイジングという専門的な職能が、どのような背

景で生まれ、現在はどのようにになっているのか。本章では、それらを明らかにするという本書の目的と、そのための基礎知識であるアメリカの高等教育制度のあらましが短く紹介される。また、学習支援（ラーニング・サポート）とアカデミック・アドバイジングの違い、すなわち、前者（下記①～④全て）は後者（同①と③のみ）を包摂するものであることを示す、以下の概念図は極めて重要である。

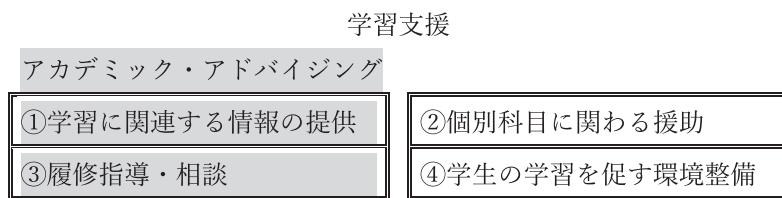


図1 学習支援とアカデミック・アドバイジングの違い  
出典 本書p.11

## 第1章 アカデミック・アドバイジングの歴史と展開

ごく初期のアカデミック・アドバイジングは教員、中でも学長が担っていたという事実が最初に紹介される。その後、幾多の変遷を経て、近年の学習者中心という考え方の登場と共に、教員を中心とした体制から教員と専任アドバイザーとの協働体制へと変化してきたことが語られる。

## 第2章 アカデミック・アドバイジング制度の現状と課題 —使命と目的・成果と評価・実践組織と担い手—

本章では、アメリカのアカデミック・アドバイジング制度に関する、多くの有力な先行研究を知ることができる。例えば、短大及び4年制大学を対象とした2003年の調査では、84%の大学が何らかの形でアドバイジング担当者を置いており、専門組織としてのアドバイジング・センターを設置している大学も約7割に及ぶなど、この分野でのアメリカの発展・充実ぶりがよくわかる。また、アドバイジングを担っているのは具体的に誰かという視点で見た、アカデミック・アドバイジング組織の7モデルという考え方も極めて興味深い。

## 第3章 アカデミック・アドバイジングの現場を訪ねて —4大学の組織・担い手・研修

本章では、著者自身によるアメリカの大学訪問調査の内容が紹介されており、いわば本書の白眉となる章である。著者が訪問したのは、それぞれタイプの異なる4つの大学で、前章で紹介されたアドバイザーとしてのミッションの有無など、アカデミック・アドバイジング制度の実際の運用についてもそれぞれ異なる段階にあることが明らかになる。

## 第4章 アカデミック・アドバイジングの専門職性とアドバイザーの専門性

この章では、専門職団体が存在することなど、まず専門性が認められることの一般的な要件を述べた上で、アカデミック・アドバイジングという今日的な専門性の現在位置を示す。さらに、大学が現実にアカデミック・アドバイジングの専門職性として求めているものは何かを探るため、求職サイトを対象としたユニークな調査を行っている。

得られた結果自体ももちろん大変興味深いが、評者にはこの調査方法自体がとても魅力的に映る。というのも、例えばURA、IR、またアドミッションズ・オフィサーなど、他の異なる専門職についても同様のアプローチでその実態を調査することが可能で、手軽な上に応用範囲が広いと確信するからである。

### 終章 要約と日本への示唆

最後の章では、これまで見たアメリカの経験を日本へ移転することの困難さが課題として述べられる。そもそも、大学職員の専門性については彼我の間に大きな考え方の相違があり、相変わらずジェネラリストが重視される日本の大学では、アメリカの事例をそつくりそのまま今すぐ適用するのは無理であろう。また、アメリカにおけるNACADAのような専門職団体の不在も、わが国の大学が教員・職員の別を問わず専門性を獲得していく上で大きな課題となることは、著者の指摘通りである。

### 3、今後の課題

今後の課題として、次の2点を指摘しておきたい。まず、本書で示された研究成果を詳細に見た場合、追加の研究や説明が必要な部分が複数あるということである。

例えば本書で、全米唯一のアカデミック・アドバイジング専門の修士課程を持つと紹介されているカンザス州立大学と、同大構内にある専門職団体NACADAとの、実際の棲み分けや両者の関係性は必ずしも明らかにされていない。

また、本書75頁には、アカデミック・アドバイザーに対する相反する評価が紹介されている。曰く、制度を推進する側の評価は高いのに、学生側からの評価は必ずしもそうではないらしい。その背景や理由は果たして何なのか。この点を明らかにしない限り、アカデミック・アドバイジングという職能の価値自体が否定されかねない。

さらには、専任アドバイザーのキャリアパスはどのようなものかについても是非知りたいところである。つまり、彼ら（彼女ら）は一介のアドバイザーとしてそのキャリアを終えるのだろうか、それとも他に大学行政職としての昇進・昇格の道は用意されているのだろうか。日本でもこうした職能を身に付けたいと願う職員が増えている今、そのような問い合わせへの回答が必要である。

課題の2点目は、日本においても、この分野で多くの実践と調査が必要だということである。本書で示されているのはあくまでもアメリカという、わが国とは大学中退率やリベラルアーツ教育の普及度など、多くの点で状況が異なる国の事例に過ぎない。したがって今後、より大事なのは、780を数える日本の大学が、本書で初めてその全体像が明らかとなつたアメリカの経験を、具体的にどのように取り入れ実践するかであろう。

最後にいさか蛇足ながら、本書に見られる表記上の不備を指摘しておきたい。「新たなアクターの登場も登場したことで」（51頁下から3行目）のような誤植、或いは「研修への参加については」（89頁10行目）のような「てにをは」の誤り、「過半数以上」（174頁12行目）のような用語の誤りが散見される。

わが国においても近い将来、多くのアカデミック・アドバイザーが誕生することにより、本書を土台とした数多の派生的な研究が生まれてくるだろう。その意味で、本書はいわば当該分野のバイブル的存在となる。そのような価値をいさかも減じることのないよう、

本書第二版以降では、上記の誤りが全て修正されるよう強く望むものである。